

大橋俊夫・河合佳子 著

生きている しゅくみがわかる 生理学

鈴木敦子（健康科学大学理学療法学）

医療系学部で生理学を教えている立場から、本書を紹介させていただく。

本書は第1章「一般生理学」、第2章「植物性機能」、第3章「動物性機能」、第4章「臨床生理学」から構成されている。

第1～3章では、合計36項目が質問の形で取り上げられている。例えば「体の働きを公園の遊具にたとえたとしたら？」(p.2)、「血液中にUFOが飛んでいる？」(p.36)といった意表をつくユニークなもの、「寝転がって飴玉をなめると何が起きる？」(p.120)、「試験などで緊張すると動悸がするのはなぜ？」(p.191)のように誰もが日常的に経験するようなものが並んでおり、眺めるだけで、あれこれ考えて、わくわくしてしまう。

この「質問形」がミソで、好奇心をくすぐられるのである。質問の答えも、日常的な経験を踏まえた丁寧な説明のおかげで、「なるほど」と腑に落ちて、スッと頭に入る。また、各質問に対する解説が4～6ページ程度にまとまっていて、本の大きさもA5サイズとコンパクトなので、カバンに入れて持ち歩き、気軽に好きなところから読めるのも嬉しい。

第4章は、貧血、黄疸、浮腫という3つの病態を「考えてみましょう」という3項目から成り、生理学の知識を基にして病状や原因を説明している。第1～3章を基礎編、第4章を応用編と考えてもよいだろう。各項目の最後は「順序立てて〇〇の原因を挙げていく」とまとめられており、知識を統合し、筋道を立てて考えることの面白さを実感できる。

本書の「序」に「筋道を立てて論理的に考える学習の醍醐味を楽しんでいただければ幸いです」とある(p.ix)。生理学教育に携わる者として、深い共感を覚える。しかし、学生に「考える学習の醍醐味を楽しませる」ことができているだろうか？と自問させると、反省の念にかられてしまう。学生にとっては難しい生理学用語を覚えるだけでも大仕事であり、特に国家試験をめざす養成校では知識を詰め込むことが優先され、面白さを伝えることは二の次にされがちだからである。

本書は好奇心を刺激してくれるので、面白いと思いつつ読んでいくうちに、自分の身体のこととして「生きているしゅくみ」を理解することができ、考える力も養われる。ぜひ医療系の学生に読んでもらい、知識を詰め込むだけではなく、知る喜びと考える楽しさを味わってほしい。そして、生理学の教育に携わる方にも一読をお薦めしたい。わかりやすく説明し、学生の考える力を引き出すヒントがいっぱい詰まっているからである。

本書は専門用語をあまり使わずに書かれているが、これは決して簡単なことではない。高度な内容を平易に解説するには、多くの努力と工夫がなされたことと思う。心より敬意を表したい。また、全編を通して読者に優しく語りかけるように書かれており、著者の先生方のお人柄がにじんでいる。読んで良かったと思える1冊である。

(A5 頁258 2016年11月 定価：本体2,300円＋税 [ISBN978-4-260-02833-2] 医学書院刊)

配食サービス、ガイドライン普及へ

厚生労働省、介護公表制度の活用促す

厚生労働省は3月31日、高齢者の健康寿命の延伸に向けて策定した「配食事業の栄養管理に関するガイドライン」を活用した取り組みを普及させるため、介護サービス情報公表制度を通じて地域の高齢者やケアマネジャーなどに情報提供するよう自治体に事務連絡した。ガイドラインでは、献立は十分な技能をもつ人が作成するとし、1日250食以上提供

するなど一定規模の事業者は管理栄養士や栄養士が担当することが妥当だとしている。また摂食嚥下機能を含めて利用者の身体状況に合わせた栄養価や調理法、メニューなどにするよう促している。

配食サービスのガイドラインについては「ニッポン一億総活躍プラン」で作成するよう示されていた。(福祉新聞・第2807号 2017年4月17日)